様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２３１７

研究課題名（和文）ロヒンギャ避難民キャンプの脆弱性とレジリエンスに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Vulnerability and Resilience of Rohingya Refugee Camps in Bangladesh

研究代表者
日下部　尚徳（Kusakabe, Naonori）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：６０６３６９７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、バングラデシュに避難したロヒンギャが暮らす難民キャンプにおける生活実態と支援状況を把握するためにフィールド調査を実施し、長期化するロヒンギャ難民問題の課題を明らかにした。これにより、難民・ホストコミュニティ間の軋轢の深化や、ロヒンギャ難民キャンプにおける治安の悪化の要因が明らかとなった。また、現地における量的・質的調査から得られたデータをもとに『The Rohingya’s Predicament from Bangladeshi / Japanese Perspectives: Between Acceptance and Friction』を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通じて、一時居住を前提としたキャンプに暮らす難民が抱える生活課題を特定し、中・長期的にも対応可能な難民支援策を講じることで、キャンプにおける難民のレジリエンスを向上させ、帰還や第三国定住にむけた希望を延展することが可能になると考える。また、バングラデシュに暮らすロヒンギャの生活課題に関しては先行研究がほとんどなく、支援の新規参入を拒む要因となっていることから、本研究の完成は官（ODA）・民（NGO）ともにロヒンギャ難民支援に積極的な日本にとって、より効果的な政策立案とその実施に寄与しうる。

研究成果の概要（英文）：In this study, a field survey was conducted to understand the actual living conditions and support situation in refugee camps where Rohingya who have taken refuge in Bangladesh live, and to clarify issues related to the protracted Rohingya refugee problem. These revealed factors contributing to the deepening conflict between refugees and host communities and the deterioration of security in Rohingya refugee camps. Based on the data obtained from quantitative and qualitative surveys in the field, we also published a book entitled "The Rohingya's Predicament from Bangladeshi / Japanese Perspectives: Between Acceptance and Friction.

研究分野：地域研究

キーワード：難民　ロヒンギャ　バングラデシュ　レジリエンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

UNHCR によると、2018 年末の時点で紛争や迫害によって故郷を追われた人の数は 7000 万人を越え、過去 70 年間で最大となった。国民国家からの庇護を前提とした社会秩序からはずれた人びとの不安や不満、厳しい生活状況を放置すれば、民族間・宗教間の断絶が深まり、国際社会全体が不安定化する恐れがあることから、複合的な難民研究の重要性が高まりを見せている。

難民として生活する人びとの実態を明らかにするためには、難民発生要因となった出身国の状況、難民キャンプでの生活状況、出身国へ帰還後の状況、第三国定住先での状況など、さまざまな段階・フィールドでの調査研究が求められる。そのどれもが難民問題の研究射程として不可欠であるが、本研究においては難民キャンプにおける生活実態と支援状況の把握に焦点をあてる。

その背景には、バングラデシュに逃れたロヒンギャ難民がミャンマーへの帰還を拒否しており、問題が長期化の様相を呈していることがある。数十万人規模の避難民が発生した 2016 年 10 月以降、両国間で帰還交渉が続けられているが、この状況のまま推移すれば大多数がバングラデシュに留まり続ける可能性が高い。難民キャンプでは 100 万人のロヒンギャが密集した状態で長期にわたって生活することで、自然災害や疾病による人命危機、森林伐採などによる周辺地域の環境悪化が起きている。また、難民を受け入れているホストコミュニティも当初は受け入れに前向きな姿勢をみせていたが、流入から 3 年以上がたっても状況が一向に改善しないことで難民との軋轢が深まっている。

そもそも難民キャンプは母国への送還もしくは第三国定住にむけ、一時的に難民が居留することを前提としている。そのため、恒久的な滞在や支援を求める難民のさらなる流入につながりかねない教育支援や就業支援、社会インフラ整備が制限されている。

しかし、地域情勢の悪化や母国の内政事情から帰還が実現せず、近年キャンプが難民の生活の場として恒常化するケースが増加している。一時避難施設としての機能しかもたない難民キャンプでの生活が長引けば、環境の悪化や心的ストレス、コミュニティの崩壊を引き起こし、難民、とりわけ子どもや女性、高齢者といった社会的弱者の生命が危険にさらされる。

研究代表者は、一時居住を前提とした難民キャンプ運営が生活環境の悪化へとつながり、結果として難民の生存可能性を低減させていることを極めて問題視している。難民が抱える生活課題に対して中・長期的にも対応可能な対策を講じ、キャンプにおける難民のレジリエンスを向上させることで多数の生命が助かるのであれば、積極的に研究投資をおこない実践への示唆を獲得する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、一時居住を前提としたキャンプに暮らす難民が抱える生活課題を特定し、中・長期的にも対応可能な難民支援策を講じることでキャンプにおける難民のレジリエンスを向上させ、帰還や第三国定住にむけた希望を延展することにある。

また、難民の生活を大きく左右する当該国政府や国際援助機関のポリシーが難民支援に与えた影響についても分析する。これらを踏まえ、日本が積極的に取り組むロヒンギャ難民支援に寄与する政策的示唆を得ることを本研究の目的とする。

３．研究の方法

（1）生活課題：難民が直面する課題を把握し、脆弱性の構成要素を検討する。

検討にあたっては、外力（自然災害や感染症、飢餓など）への曝露（exposure）、感受性（sensitivity）、対応力（response）からなる分析枠組みのもとで構成要素を抽出し、難民キャンプおよびホストコミュニティの生活課題を量的・質的調査から複合的に明らかにする。

（2）ホストコミュニティへの影響：受け入れ側の住民が直面する課題を検討する。

2019 年 8 月に、難民を受け入れるホストコミュニティの住民による大規模な難民支援反対運動が起きた。ホストコミュニティとの共存はキャンプの安定運営に不可欠であることから、水源の枯渇や耕作地の不足、日雇い賃金の低下など、長期にわたって難民を受け入れることで周辺地域に顕在化した課題を、難民を対象とした上記枠組みのもと質問紙調査および半構造的インタビュー調査によって明らかにする。

（3）外部支援の影響：関連国・国際援助機関の支援ポリシーの変遷を明らかにする。

外部支援によって成り立っている難民の生活は、バングラデシュ政府や国際援助機関、NGO の援助ポリシーに大きく左右される。そのため、難民キャンプで活動する援助団体の支援アプローチの変化が難民の生活にどのような影響を及ぼしたのかを具体的に明らかにするため、関連機関の援助ポリシーの変遷と支援概要に関して援助・外交関係者へのインタビュー調査を実施し、難民支援の全容を把握する。

４．研究成果

現地における量的・質的調査から得られたデータをもとに、Academic Press and Publishers

Library から『*The Rohingya's Predicament from Bangladeshi / Japanese Perspectives: Between Acceptance and Friction*』（日下部尚徳・杉江あい・大橋正明編著）を出版した。以下に現地調査を通じて明らかになったバングラデシュに暮らすロヒンギャ難民の生存課題に関する概要を示す。

① 難民とホストコミュニティの軋轢

2017 年のミャンマー軍によるロヒンギャ集落の大規模掃討作戦から 2021 年段階で 4 年が経ち、難民を当初好意的に受け入れてきたホストコミュニティも、コロナ禍の影響で疲労が見られるようになった。また、帰還を前提とした受け入れ政策の影響で、教育や就労の機会が制限された難民たちは、ますます社会の中で周縁化され、不満を募らせるようになっていった。

現地でのフィールド調査を通じて、難民の流入が現地の人々の生活を一変させたことが明らかになった。例えば、援助物資として配給されるコメや豆、調理用油をロヒンギャが転売するため、これらの商品の価格が下落する一方、十分な配給がない新鮮な野菜や肉、魚、薪、小麦粉などはホストコミュニティを通じて購入することになるため、これらの市場価格は上昇する。また、原則禁止されているにもかかわらず、現金収入を得たいロヒンギャが低賃金で日雇い労働に就くことで、労働賃金の低下も見られた。キャンプ周辺では 2018 年の段階で 20%もの賃金低下があった。

こうした価格変動をうまく捉えた一部の人びとは利益を上げることに成功し、土地持ちの富裕農家は賃金の低下により日雇い労働者を雇いやすくなった。しかし、稲作を主な生業とする大多数の農民、特に土地なし貧困層にとっては負の影響の方が大きく、次第に人々はロヒンギャのせいで生活が厳しくなったと感じるようになっていった。膨大な数の援助関係者が地域に入ってくることで、家賃やリキシャ（人力車）、三輪タクシーの乗車賃など、日常生活に関わるものの価格が目に見えて上昇したことも、ロヒンギャに対する怒りへとつながった。さらに、難民を狙うブローカーがホストコミュニティの住民も標的とすることで、人身売買や児童婚の脅威が高まり、誘拐や強盗といった犯罪が増加したとホストコミュニティが認識していることが本研究によって明らかになった。

② ロヒンギャ難民キャンプにおける治安の悪化

上記の不安定なキャンプおよびホストコミュニティの状況を反映して、難民キャンプとその周辺では治安が著しく悪化し、不審火や殺人事件、薬物の密輸入業者と警察・国境警備隊との銃撃戦が相次いだ。2021 年 3 月 22 日には、コックスバザールのバルカリ難民キャンプで大規模な火災が発生し、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の発表によると 15 人が死亡、550 人が負傷、400 人が行方不明となり、4 万 5000 人が避難を余儀なくされた。

また、2022 年 1 月から 2 月にかけても不審火による大規模火災が相次いだ。特に 1 月 9 日にウキヤのキャンプ 16 で発生した火災では、1200 棟が焼失し、少なくとも 3 万人が住む場所を失った。火災の原因は特定されていないが、ホストコミュニティやロヒンギャ内部抗争関連の放火の可能性も噂された。

2021 年 9 月 29 日には、ウキヤ難民キャンプでロヒンギャ難民の活動家モヒブ・ウッラーが殺害されるという事件も発生した。同氏はミャンマーでの迫害や難民キャンプでの生活を国内外に発信するために設立された「平和と人権のためのアラカン・ロヒンギャ協会」（ARSPH）の代表で、2019 年にはジュネーブで UNHCR の会合に参加したこともあったが、帰国後に何者かから脅迫を受けていた。その後も難民キャンプコミュニティのリーダーである「マジ」が殺害される事件が頻発するなど、キャンプ内の治安が本研究期間中に急激に悪化した。

③ バングラデシュ政府による無人島への難民移送計画の実施

ホストコミュニティと難民間の軋轢を緩和し、キャンプの環境を改善するため、政府は難民の一部をコックスバザールからベンガル湾に浮かぶバシャンチョール島へ移送する取り組みを進めた。しかし、国際人権団体が離島の災害リスクや難民の意に沿わない形での強制的な移住が行われることへの懸念を表明しており、国連機関は対応を明確にしていなかった。2021 年 5 月 26 日、インドにサイクロン「ヤース」が上陸し、隣国であるバングラデシュでも 5 人が死亡する被害が出たが、バシャンチョール島では死者や負傷者が出なかったとして政府関係者は島の安全性を強調した。しかし、5 月 31 日に UNHCR の職員がバシャンチョール島を訪問した際、すでに島に移住していた難民による数千人規模の移送反対デモが発生するなど、移送に関する説明が難民や援助団体に十分に行われているとは言い難い。難民にとって島への移送は災害リスクだけでなく、コックスバザールのキャンプでは規制を潜り抜けてわずかに確保できていた移動や労働の機会までもが奪われることを意味する。2021 年にはバシャンチョール島から脱出を図ったロヒンギャ難民が多数拘束されている。

④ キャンプから脱出する難民の増加

2021 年 2 月に発生した軍事クーデターの終結の目途が立たない中、バングラデシュに避

難したロヒンギャの人々の帰還はますます遠のいている。避難が長期化し、キャンプの情勢も不安定化したため、海を越えて第三国へ危険な脱出を試みる人びとが増加した。UNHCR によれば 2022 年にベンガル湾やインド洋のアンダマン海を渡って国外に逃れようとしたロヒンギャの数は 3500 人以上に上る［UNHCR 2023］。2021 年の数が 700 人前後であったことに鑑みれば、この数字だけでも大幅な増加と言えるが、実際には公式数字の数倍の難民が脱出を試みていると見られる。

2022 年 12 月には故障したボートで 1 カ月以上もアンダマン海を漂流していたロヒンギャ難民 174 人が、インドネシアのアチェ州で救助された。食料や水も尽き、医薬品もない状態で、緊急の医療措置が必要な状態であった。その後も同様にボートで漂流するロヒンギャ難民が後を絶たず、UNHCR は周辺国に救助を呼びかけたが、積極的な協力は得られず海上で多くのロヒンギャが死亡した。こうした密航には国際的な人身売買組織も関わっているとされ、バングラデシュの難民キャンプでは監視態勢を強化しているが、身の安全や就労、子どもの教育、国籍を求めてキャンプ脱出を試みる難民は後を絶たない。

本研究を通じて、ロヒンギャ難民は、密航斡旋業者などを通じてマレーシアやインドネシア等の第三国を目指していることが明らかになったが、全容解明にはさらなる現地調査が不可欠である。バングラデシュからロヒンギャ難民が脱出する背景には、コロナ禍で急激に悪化したキャンプの生活環境やホストコミュニティ・難民間の軋轢、移動を可能とする人的ネットワーク・密航斡旋業者の存在、武装勢力による治安の悪化など、多様な要因がある。これらが複合的に影響しあった結果、難民は数十万タカを密航業者に支払い、危険を承知でバングラデシュの難民キャンプからの脱出に踏み切ることが本研究を通じて明らかになった。

［引用文献］

UNHCR. 2023. *Global Trends: Forced Displacement in 2022*. Copenhagen: UNHCR.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 日下部尚徳	４．巻 7
２．論文標題 コロナ禍の女子児童労働とバングラデシュー教育の不均衡は何をもたらすのかー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立教ESDジャーナル	６．最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日下部尚徳	４．巻 11
２．論文標題 ロヒンギャ難民問題とクーデター	５．発行年 2022年
３．雑誌名 なじまぁ	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日下部尚徳	４．巻 794
２．論文標題 ミャンマーの政治状況が生んだ「ロヒンギャ問題」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 月刊社会民主	６．最初と最後の頁 12-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日下部尚徳	４．巻 オンライン
２．論文標題 コロナ渦のバングラデシュ ―グローバル経済の末端で何が起きているのか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 コロナ対応から考えるアジアと世界	６．最初と最後の頁 オンライン
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉江あい	4．巻 11
2．論文標題 ミャンマーにおけるロヒンギャ難民の経験ーバングラデシュナヤパラキャンプにおけるインタビューをもとに	5．発行年 2021年
3．雑誌名 広島大学現代インド研究 ― 空間と社会	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日下部尚徳	4．巻 773
2．論文標題 だれ一人取り残さないためにーSDGsと国際援助	5．発行年 2021年
3．雑誌名 まなぶ	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日下部尚徳	4．巻 62(7)
2．論文標題 バングラデシュの女子児童労働の現状と課題ー家事使用人労働の事例から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保健の科学	6．最初と最後の頁 485-490
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 日下部尚徳
2．発表標題 成長と貧困のバングラデシュ -グローバル経済の末端で顕在化した社会基盤の脆弱性-
3．学会等名 日本南アジア学会第35回全国大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 Naonori Kusakabe
２．発表標題 ‘Populism in Bangladesh and the Rohingya Refugee Issues: A Study of Refugee Assistance and Local Politics
３．学会等名 The 13th INDAS-South Asia International Conference Populism, Diversity, and ‘Enemies of the People’: Politics and Society in South Asia in the Twenty-First Century（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shakil Khan and Ai Sugie
２．発表標題 Challenges of support for Rohingya refugees and host community in Bangladesh: A focus on water resources in the Teknaf peninsula.
３．学会等名 34th International Geographical Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Sugie
２．発表標題 The transnational Islamic network between rural Bangladesh and the Middle East: focusing on Bangladeshi migrant workers and returnees
３．学会等名 34th International Geographical Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 杉江あい
２．発表標題 バングラデシュにおける他者との共在―身体・場所・被傷性
３．学会等名 東南アジア学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ai Sugie
２．発表標題 Rohingyas in Japan: Their status, network and activities.
３．学会等名 6th International Congress of Bengal Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 日下部尚徳
２．発表標題 コロナ禍における 国際ボランティア学の研究射程ーバングラデシュの貧困・児童労働・難民の事例から
３．学会等名 国際ボランティア学会2020年度全国大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計9件

１．著者名 日下部尚徳	４．発行年 2022年
２．出版社 毎日新聞出版	５．総ページ数 272
３．書名 アジアからみるコロナと世界 我々は分断されたのか	

１．著者名 日下部尚徳	４．発行年 2022年
２．出版社 アジア経済研究所	５．総ページ数 596
３．書名 アジア動向年報２０２２	

1．著者名 日下部尚徳	4．発行年 2022年
2．出版社 人間文化研究機構地域研究推進事業「現代中東地域研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点	5．総ページ数 372
3．書名 中東・イスラーム諸国政治変動ハンドブック2021（分担執筆：バングラデシュ）(pp.311-325)	

1．著者名 杉江あい	4．発行年 2022年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 230
3．書名 論文から学ぶ地域調査（分担執筆：バングラデシュの物乞いをテーマに論文を書く）(pp.111-118)	

1．著者名 日下部尚徳	4．発行年 2022年
2．出版社 アジア経済研究所	5．総ページ数 278
3．書名 アジア動向年報2010-2019（分担執筆：アワミ連盟による一党支配体制の確立と 高度経済成長）(pp.1-5)	

1．著者名 大橋正明	4．発行年 2021年
2．出版社 ブリタニカ・ジャパン	5．総ページ数 680
3．書名 ブリタニカ国際年鑑2021（分担執筆：南アジア情勢）(pp.233-234)	

1．著者名 後藤玲子、横藤田誠、ポリー・ヴィザード、齊藤拓、小谷眞男、上野貴彦、大森正博、田中伸至、伊奈川秀和、武田友加、片山ゆき、佐藤幸人、金早雪、原島博、日下部尚徳、細谷幸子、佐藤千鶴子、宇佐見耕一、畑惠子、村川淳、金子光一、鈴木敏彦、鈴木良、山本真実、金子充、堀真奈美、齊藤拓、江藤双恵、中村安秀、岡伸一	4．発行年 2020年
2．出版社 旬報社	5．総ページ数 444
3．書名 世界の社会福祉年鑑2020〈2021年度版〉感染症と社会福祉（分担執筆：バングラデシューコロナ禍と貧困・児童労働・難民－）（pp.237－245）	

1．著者名 日下部尚徳	4．発行年 2023年
2．出版社 アジア経済研究所	5．総ページ数 600
3．書名 アジア動向年報2023（分担執筆：ウクライナ危機下の経済不安とバランス外交 ： 2022年のバングラデシュ）（pp.448-470）	

1．著者名 Naonori Kusakabe, Ai Sugie, Masaaki Ohashi	4．発行年 2024年
2．出版社 Academic Press and Publishers Library (APPL)	5．総ページ数 308
3．書名 The Rohingya’s Predicament from Bangladeshi / Japanese Perspectives: Between Acceptance and Friction	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	杉江　あい (Sugie Ai) (10786023)	京都大学・文学部・講師 (13901)	
研究分担者	大橋　正明 (Ohashi Masaaki) (20257273)	聖心女子大学・グローバル共生研究所・名誉教授 (32631)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関